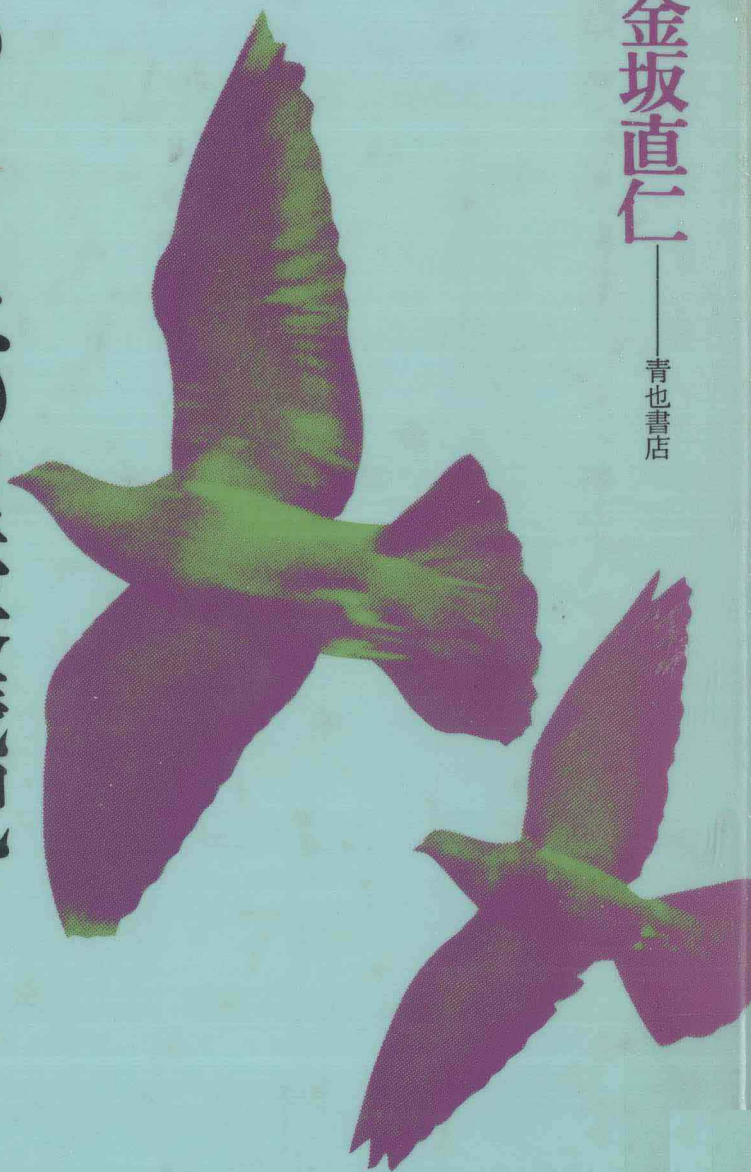


金坂直仁

青也書店

わらしべの里実践記

ボランティア福祉の原点を求めて

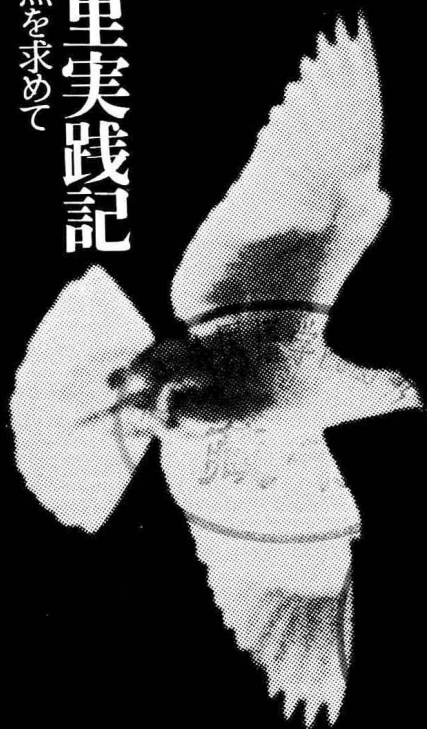


青也書店

坂直仁

わらしべの里実践記

ランティア福祉の原点を求めて



【著者紹介】 かね さか なお ひと 金 坂 直 仁

1934年 4月11日 奈良市に生まれる
1960年 日本福祉大学社会福祉学部卒業，同年岩手
県社会福祉協議会に入る
1964年 栃木県社会福祉協議会にかわり，68年，地
域組織部長となる
1975年 足尾町のコミュニティ・ケア事業を育ては
じめる
1976年 自宅の庭先にとちぎ子どもの家を開設
1980年 3月 上記活動が発展し財団法人わらしべの
里となり，同会の業務に専任するため，栃
木県社会福祉協議会を退職
現在 財団法人わらしべの里常務理事，栃木県立高
等看護専門学院・埼玉県立衛生短期大学・白
治医科大学附属高等看護学校，各非常勤講師，
日本子どもの本研究会会員
〈著書〉「地域をたがやす」(全国社会福祉協議会出
版部)
〈住所〉 栃木県栃木市大宮町2708—2
電話 0282(27)1627

わらしべの里実践記

——ボランティア・福祉の原点を求めて——

定価1,400円

昭和57年1月1日 初版発行

著 者 金 坂 直 仁

発行者 沖 中 美 実

発行所 株式会社 青 也 書 店

東京都文京区本郷 3—40—3
電話・812—7201 (代) 振替・東京 9—99805

©1982 N. Kanesaka 印刷・製本：壮光舎印刷(株)
乱丁・落丁はお取替えいたします

ISBN4-88105-517-8 C0037 ¥1400E

「わらしべの里」 由来記

今は昔、京の都に一人ぼっちの貧しい若者がいたが、あまりの貧しさに耐えかねて、観音様に助けを求めた。すると、「運は自分でつかむもの。このお堂を出て初めて手につかんだものをしっかり握って行くように」というお告げがあった。

若者が最初につかんだのは、何と、一本の「わらしべ」であった。若者は、これにアブを一匹くくりつけ、飛ばしながら歩いていると、ちょうど牛車に乗って通りかかった公家の若君にねだられ、みかん三個と取り替えた。

それから次々と、人との出会いを大切にしていくうちに、みかんが布に、布が馬に——いつの間にか、この若者は、「わらしべの長者」と呼ばれる大金持になったという。

（今昔物語「わらしべの長者」より）

「わらしべの里」は、この若者のように、幸せを自らの手でつかみ、人との出会い、心のふれあいを大切にしようと、この日本に昔から伝わる民話から名づけたものである。

目次

「わらしべの里」由来記

プロローグ

第Ⅰ部 私のボランティア・福祉との出会い……………17

第1章 ふれあったこと・ふれあった人……………19

1 ユース・リーダーとして学んだこと……………19

名古屋YMCAでの子どもたちとの出会い……………19

私をボランティア活動に駆りたてたもの……………21

2 野にいる知識人・大泉俊さんとの出会い……………23

プロのコミュニティ・ワーカーとして歩みだすまで……………23

身障福祉司・大泉俊さん……………24

「にわとり文庫」の開設……………26

大泉俊さんに学ぶ 29

3 真の福祉活動をめざして…………… 34

福祉水準「全国最低」・栃木県へ 34

足尾町に実現した地域福祉のころ 36

自分の町で何ができるか 37

第2章 娘に学ぶ…………… 40

1 ある日、突然に…………… 40

福祉のプロ意識と親心の「せめぎあい」 42

娘の育ちのペースに追いつけない 44

最後の決断——施設へ入所させる 46

2 立ち直りへの道すじ…………… 49

また、神様のおよびだね 49

施設への入所はしあわせへの道か 51

長期的展望を求めて決断する 53

親としてなすべきことは？ 56

福祉のプロとして、今、何をなすべきか 57

新たな出発——娘とともに社会福祉の道を 61

3 性をはぐくむ…………… 63

娘の「女性」としての育ちを見つめて 65

心身障害者の「性」の条件 67

可能性を信ずる「親の欲目」 69

第Ⅱ部 とちぎ子どもの家からわらしべの里へ…………… 73

第1章 ある日の子どもの家の活動…………… 75

1 ボランティアの活動日誌より…………… 77

2 子どもの家の日常活動…………… 85

第2章 地域に育つ子どもたち…………… 91

1 地域の子どもと障害児の遊びの文化活動…………… 91

子どもの家が生まれるまで 91

子どもの家の活動目標 93

共存、共感そして受容への過程 97

* めぐみちゃんはどうしてお話ができないの 97

* あのおともだち、耳からヒモが出ていたよ 99

2 子どもをとりまく状況 102

子どもたちはみんなスクスク育っているか 102

子どもは子どもの中で豊かに育つ 105

地上ではコマまわしを、空には手づくりのタコをあげよう 106

3 ともに歩むガンバレコールのハイキング 110

4 キャンプの夜、若者の心が燃える 114

キャンプで成長する子どもたち 114

大きく育つボランティアたち 116

5 ジュニア・ボランティアの決断 119

6 あっちゃんのあいさつ 122

7 私の中から、わらしべの里の血が 128

8 子どもは地域で豊かに育つ 132

第3章

わらしべの里への脱皮と活動内容

136

1 子どもの家で学んだこと・主張したこと

136

とちぎ子どもの家応援団の結成

136

言いだしっぺの努力と社会の応援

140

自立の福祉をめざして

143

地域の子どもと障害児の遊びの文化施設をつくろう

145

2 とちぎ子どもの家を社会の財産に

148

論文「これからの社会福祉」が全国一位に

148

長期派遣ボランティアの配置

151

児童図書と児童映画

153

映画「兎の眼」にとりくんで

155

若者は「文化」を求めている

157

3 財団法人わらしべの里の誕生

160

わらしべの里運営ボランティア会議の結成

160

心身障害者小規模通所療育授産事業「わらしべの家」の開設

162

4 わらしべの里の福祉活動のすべて……………164

地域サービス事業……………166

公費補助事業……………167

収益事業……………170

* 福祉用品部……………170

* 図書販売……………172

* 学校映画上映……………172

* わらしべ文具店……………174

* 印刷事業部……………175

* 「週刊わらしべの里」の発行……………173

第Ⅲ部 わらしべの里の夢……………183

第1章 住民・ボランティアの参加と企業的努力……………185

「金」でなく「人」に支えられることの意味……………186

福祉事業体のあり方を問う……………188

わらしべの里・収益事業部門のとりくみ……………189

地域福祉の自立と展望……………191

第2章 現代版「若衆宿」をつくろう……………195

うれしい悲鳴——多すぎるボランティア 196

子どもの家のボランティアの会づくり 198

若き職員とボランティア 200

若者たちへのメッセージ 204

第3章 アジアに広がるわらしべの里の想い……………207

スリランカの女性から見た日本 207

わらしべの里に集う外国からのお客さん 211

わらしべの里・海外派遣員 213

もらい風呂ボランティアの募集 215

東南アジア福祉活動見聞記 219

第4章 いのちを深める——わらしべの里の未来を語る……………224

本当の福祉とは何か 224

わらしべの里の未来像 228

①ポニー牧場の経営 228

②子どもの森の活動を 229

あとがき

- ③ 専用のキャンプ場を 230
- ④ 若者たちのチャレンジ・センター 232
- ⑤ コミュニティ的福祉施設 233

わらしべの里実践記——ボランティア・福祉の原点を求めて——

プロローグ

一九七六年三月七日日曜日、その日は、自宅の庭先に「とちぎ子どもの家」と名づけたボランティア活動の拠点が開設された日であった。その当時できていたのは、間口二間半に奥行三間の鉄骨プレハブの小さな建物が一棟だけであったが、それらの基礎工事と車イス用のスロープとベランダは、地域の人たちの汗と真心でできたものであった。

私は、当日、その開設のセレモニーでのあいさつの中で、それらの人びとの協力と参加を感謝し、今後、この「とちぎ子どもの家」を中心として、子どもたちのために豊かな未来を築いていきたいと訴えていた。

しかし一方で、私の心中は、これから先のことを考えると不安でいっぱいであった。財政的な問題をふくめて、具体的な見通しについて、私自身、明確な予想をもたないスタートであったからである。それから五年後、「地域の子どもと障害児の遊びの文化活動」と名づけたこの活動も、「財団法人わらしべの里」へと成長した。障害ある人の通所の授産事業も始まった。県内の小・中学校での児童映

画を通しての文化活動、寝たきり老人への福祉用具販売を仲立ちとする在宅サービス活動、そしてオフセットの軽印刷による収益事業から文房具店の開設、さらには国際交流部の設置まで、おおよその骨組みが明らかになってきた。

また、附近の環境も大きく変わってきた。始めたときは、北側に一軒しか家がなかったが、今ではすっかり住宅にとり囲まれている。地域の中での福祉活動としては大変好都合なことではあるが、今後、事業を伸ばしていこうとするには、スペース的にも無理がある。近い将来、別の場所により広い活動の場を求めねばならないと考えている。

たとえば、余り遠くない場所に、高度な規模と内容をもつキャンプ場、そしてそこには、ポニーや羊、うさぎなどの小動物の牧場を併設する。そこで、障害児をふくめた地域の子どもたちが動物を通じて、心のふれあい、ぬくもりを感じあい、一方、現在わらしべの里にかかわって活動をしている多くのボランティアたちのたまり場として、お互いに豊かな人間性を育む場となることができればこんなうれしいことはない。実現までにはまだまだ数多くの障害をのりこえなくてはならないだろうが、。現段階でわらしべの里がとりくんでいる事業内容は、すべて、住民参加、企業努力、そして公費補助という三者のバランスで成り立っている。これは、ひとことというならば、自立の福祉・自前の福祉をめざしているということである。私は、これこそが、これからの社会福祉活動の歩むべき方向であると考えている。